

鴻 koh

月刊俳句誌

令和四年六月一日発行
（毎月一日発行）
第10巻第6号 通巻204号

6 月号
2023



ひらひらと蝶はらはらと花の昼

四月馬鹿なり真つ直ぐな暈の目

見返れば水かげろふが蝶を生む

蘂のさくら健気な花持てり

松の芯つんと大空放哉忌

普段着で花の遊子となりゐたる

騙し絵のごと

主宰作品

増成栗人

騙し絵のごと墨東の花が散る

知らざるは及ばず虚子の忌の夕べ

陽炎の真つ芯に立つ鷺一羽

夜に入りて花盗人の風となる

いささかの雨かたかごの花の雨

文束を焚く火の美しき啄木忌

畦焼きの炎に修羅のありにけり

こでまりの花

副主宰作品

谷口摩耶

夕永し手製の茶杓いただきぬ

こでまりの弾んで花の盛りかな

市川氏行徳

神輿工房川風に柳絮とぶ

つばくろや街の外れの常夜燈

ゆるやかに暮れて鹿尾菜ひじきの混ぜ御飯

春雷の行きつ戻りつして暮るる

鈍行に揺れ新緑の神田川

川沿ひの路地を歩めり花あやめ

鈴蘭の鈴音にふと振り返る

海風に打たれし髪を洗ひけり

四月三十日は俳人協会千葉支部の総会と俳句大会でした。朝から風雨で、特に風が強く、正に「春の嵐」でしたので、腰痛の私は行くだけで大変でした。JR千葉駅からモノレールに乗って千葉みなと駅で降りると、海に近い所為か本当に強風で、風に押されて吹き飛ばされそうになり、看板のような物に掴まっていました。春の嵐は年々強くなっているようです。先日は地震もあり、何となく心配なこの頃です。

荒川心星



辛夷の蕾

木洩れ日の飛鳥の寺に春の鹿
なづなはこべら鳥が去り鳥が来る
紅梅に昨夜の雨粒吉良の郷
蘆原を出てほろほると雉子のゆく
溜めるだけ光溜めおけ猫柳
春雨に打たれ孟宗竹の青
嶺を二つ繋ぎて春の虹が立つ
妻とふたり辛夷の蕾ふくらめり

棹をさす隙間もあらず花筏
大楠の根方の祠鳥の恋
をだまきや詩仙の間なる猪の目窓
青空に触れては竹の秋となる
野遊びのしばしば屈み込んでゐる
囀りの一樹へ寄らむ庭草履
染まりたき青麦畑一揆の地
四月一日出掛けに取れる貝釦



花筏

半谷洋子

椿寺 千の蕾を抱へたる
 打ち合うて竹の秋へと色づきぬ
 風水に守られし街花曇
 バス停に列が人も屋に列桜東風
 花冷えの錦市場に紛れ込む
 遠霞鬼門に比叡延曆寺
 祈願絵馬御礼の絵馬風光る
 鳥雲に買ひ損ねたる黒七味

豆腐屋のラッパが春よ春ですよ
 愛されて母の苦労や花大狼
 父あらば父へ手紙を涅槃西風
 諳んじる春は久女の花衣
 覗き込む抹茶茶碗の中の春
 草餅がほんとに好きな人でした



岩槻市の桜は町おこしとして、昭和二十四年頃に約
 三百本の植樹を行ったことが始まりです。現在は五条
 川沿いに約千四百本が花を咲かせています。桜道を歩
 くたびに、平和と健康のありがたみをつくづく思いま
 す。

羽音集

谷口摩耶 選



船橋 菊池ひろ子

流山 江部 博

習志野 野村昌代

俳誌のサロン

伊勢崎 原 光生

枝垂れ梅触るる丹の橋渡りけり
樹下を染めひときは紅し落椿
菜を洗ふみどり溢るる春の水
一人に一つ真つ青な空卒業す
木の芽吹く土に還りし父祖の墓
思ひきり夜の鞦韆を一人きり
歩き疲れてたんぽぽの咲く湖畔
鷹鳩と化す日を当てもなく歩く
アンコールの怒涛のごとし春の宵
全盲のソプラノの歌手あたたかし
不時着の紙飛行機や草青む
やはらかきトルコブルーの皿よ春
水田のまん中に寺亀の鳴く
からまつ森の音消す雪崩かな
春の風墓碑銘なぞる白き指
ストリートピアノに春の光かな
定年が間近かになりて二日灸
理髪師の手順違へず目借時
風光る新車を祓ふ御幣かな
東北忌今日を限りのガソリン車

松戸 綾戸五十枝

松戸 針谷忠郎

会津 中川幸恵

喜多方 福地タカ

蜂蜜の琥珀ひと匙春の雨
浅草は雨となりけり春の宵
手のひらの乳液匂ふ春の夜
試合終へ手話の挨拶春の風
ふつくりと大豆炊きあげ春の暮
手渡しの手からこぼるる雛あられ
慎ましや書棚に飾る紙雛
梅散るや花芯をつつく雀二羽
ひこばえや三度訪ねし誕生寺
房総のフラワーライン花菜風
星冴ゆる今宵は熱きミルクテイ
薄氷と遊ぶ子の声軽やかに
残雪や綻び見つけ靴を買ふ
のどけしやナビの左折を逃したる
春の雲スーッと一着新調す
春待つや話いつ迄茶話日和
水底に白き襟足見せて芹
ダイレクトメールどさりと四温かな
アザレアのしんそこ紅し春の雪
蒼天に五指を広げて路のたう

名古屋 後藤美帆

柏 高橋 詩

豊橋 西山三子

俳誌のサロン

豊橋 鈴木容子

思ひ出の父の優しさ雛祭
図書館へ名のみ春を歩きけり
ぼた餅を食べて春めく茶の間かな
啓蟄の蚯蚓をつつく児が独り
子どもらの声が猫の仔おどろかす
しなやかに降る連翹の月あかり
早春の日の当たりぬる土竜塚
水吐くは一夜の夢か寒蛭
石蹴りの少女に春の日が溜まる
はくれんの蕾の割れ目雨の音
老木のさくらの蕾緩みけり
でこぼこの田にうつすらと春霞
さくらさくら朝より雨の日曜日
茹でたてのスナップ豌豆春の宵
ふんはりとリースに飾る花ミモザ
朝戸緑りミモザの花の眩しかり
梅まつり午後の日差したたぷりと
三度目の採血の針山笑ふ
黄水仙歩くあとから香り立つ
水温む日なり髪型変へに行く



「根岸・洋式競馬発祥の地」 鈴木 崇

今回は、横浜・根岸を歩く。

JR根岸駅から歩いて数分の高台に面して「根岸なつかし公園 旧柳下邸」がある。大正時代に建設された洋館付きの近代和風住宅を保存した公園だ。洋館の屋根が周囲の町並みから突き出しており、大正モダンなたたずまいと相まって近隣のランドマーク的存在となっている。

ジブリアニメ『コクリコ坂から』（宮崎吾朗監督作）に登場する「コクリコ荘」のモデルの一つともいわれている。港を見下ろす丘に立つ洋館、確かにジブリアニメの格好の舞台だ。

かつて根岸湾は風光明媚で知られた。幕末から居留外国人にも「ミッシェル・ベイ」（命名はペリー艦隊）と呼ばれ親しまれた。幕末明治の日本風景を数多く撮影した写真家F・ペイトも、本牧や根岸に整備された遊歩新道とともにミッシェル・ベイの光景を記録している。

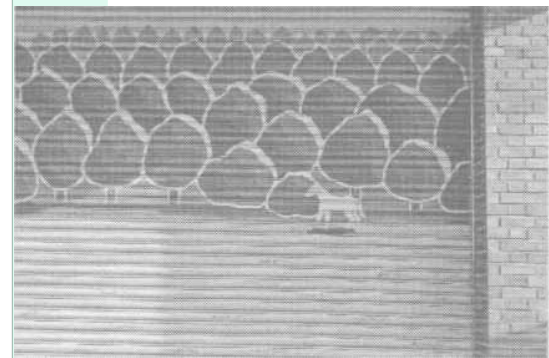
根岸は洋式競馬発祥の地でもある。高台に広がる芝生と森の公園「根岸森林公園」は、「根岸競馬場」跡地である。敷

地を占める芝生広場は、開放感があり、気持ちが良い。競馬場は慶応二年（1866年）に完成し、翌年から七十六年間、競馬が行われた。もともとは居留外国人のための娯楽として始まったが、やがて日本人も参加した社交場として賑わい（伊藤博文からも楽しんだ）、その後建てられた各地の競馬場のモデルとなった。

在りし日の観覧スタンド「旧第一馬見所」が遺構を残す。三つ並んだ塔が特徴的で、威容を誇っている。

公園内の「馬の博物館」では、馬と人の交流から生まれたさまざまな交物を展示紹介している。訪れた時には「季節・馬四季の風景」のテーマ展示を開催していた。馬に関する季節をクローズアップして紹介し、季節の解説、それらの季節を使った代表的な句のパネル、また関連する実物や写真資料などを見ることができた。

「春駒踊（新年）の春駒人形、「ダービー（夏）」の優勝肩掛など見ていて楽しかった。「チャグチャグ馬コ（夏）」との馬子人形のチャージングさといったらない。



根岸森林公園

なかでも「馬洗ふ（夏）」の様子を描いた広重の浮世絵「五十三次図会 岡崎」には強く心惹かれた。矢作川に架かる矢作橋の下で馬を洗う男の後ろ姿。当時、夏には牛や馬を川や海で洗うことが多かった。暑い道を馬に乗ってきて川の流れに入り、足を冷やすなどした。役馬を慈しむ、何とも言えない詩情がある。

ポニーセンターでは、さまざまな品種の馬を飼育している。飼育員に大切に育てられているのだから、みな優しい眼をしてい

楽庵閑話



車社会をはるかにしのぐ超スピード社会のインターネットの時代にのんびりと俳句なんて言われてしまいました



たしかに俳句はスピードとは無縁だし現代では言葉もまた情報のスピードに対応した記号的でバーチャルなものになって



歩く速度でものを確かめ記号的ではなく実感的生命の言葉をよくとする俳句は趣味を越えて生命観として必要とされるのでは



バーチャルではおなかはふくれませんが説得力ある

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>